

## 【報告・紹介】

# 共生空間『見沼田んぼ福祉農園』の取組み～生命とコミュニケーションの多元化を目指して

—公共政策部門第 11 回対話研究会〈福祉環境交流センター連続セミナー第 30 回〉報告

千葉大学公共研究センター フェロー  
野村 眞弓

千葉大学 21 世紀 COE プログラムでは『環境と福祉』の統合をテーマの一つに挙げているが、地域レベルにおいては福祉やケアと自然（農業）の要素を融合させた様々な試みが各地で展開され始めている。公共研究センター公共政策部門では、そのような先進的な取組みとして注目される埼玉県さいたま市の「見沼田んぼ福祉農園」について、同農園の若手ボランティアが組織する「見沼・風の学校」から、事務局長の猪瀬浩平氏（東京大学総合文化 / 文化人類学）、同事務局スタッフの石井秀樹氏（東京大学新領域 / 造園学）を講師に迎えて、2005 年 11 月 30 日（水）15:00～17:30、千葉大学大学院社会文化科学研究系総合研究棟 2 階 マルチメディア会議室にて、第 11 回公共政策部門対話研究会〈福祉環境交流センター連続セミナー第 30 回〉を開催したので、その概要を報告する（なお、予定していた見沼田んぼ福祉農園代表の猪瀬良一氏は体調不良のため、残念ながら出席されなかった）。

## 農地保全と福祉の融合

見沼田んぼは、埼玉県のさいたま市と川口市にまたがる東西 10km、南北 14km、面積 1260ha の広大な農的緑地空間であり、武蔵野の原風景として親しまれている。1958 年の狩野川台風による水没被害から遊水地として機能が認識され、1965 年に制定された宅地転用を原則として認めない見沼田圃農地転用方針（『見沼三原則』）により、緑地（空地）として維持され、今日に至っ



# 見沼学

みぬまなび  
2005 夏号

特集 福祉農園の公共性を問う

市民参加型農地を守る「見沼田圃公有地化推進事業」  
 近 尚野（元 埼玉県農林総合研究センター）  
 見沼たんぼ福祉農園の設立をめぐって  
 熊野 一（公益財団法人福祉農園協会）  
 みぬ「福祉農園 見沼特号」2005.1.31  
 一般社団法人日本福祉農園、農林部、農産物卸売業及び  
 見沼たんぼの活用、土地利用と労働  
 藤本 吉弘（わがびこライティング編集部）

**MinumARTs**  
見沼の技法・知恵・芸術に向かって

(写真提供：「見沼・風の学校」見沼学編集部)

ている。

この見沼田圃農地転用方針は、地権者の土地利用を制限し、経済的不利益を強いるため、相続時に見沼たんぼに相応しい土地利用がなされない場合、1998年から埼玉県が農地として公有地化している。この見沼たんぼ福祉農園は、埼玉県と管理運営委託契約を結ぶ形で、その公有地の一角（0.83ha）を活用し、農地保全と福祉を融合させた活動を展開している。

石井氏からは、見沼たんぼの地理的現況と保全の経緯を踏まえつつ、福祉農園代表の猪瀬良一氏らが、知的障害のある長男の「就労」の場として、福祉農園を1985年頃から実践をし、構想を暖めてきたこと、そして1986年から県や市に提出し続けた要望書が実る形で、実現した現在の福祉農園の発展経緯が紹介された。現在は、障害者福祉団体が、引退したシニアのボランティア、「見沼・風の学校」の若者と連携しつつ、障害者のリハビリテーションのみならず、販売を目的とした野菜生産、近隣農家との交流、ひいては大学生のインターン

シップや、企業研修の場として、多面的な活動が行われ、地域コミュニティーを育てていることが紹介された。

また福祉農園の実践を記録し、議論を深めることを目的とした研究機関誌「見沼学 (みぬまなび)」の意義について、その創刊から述べられた。

続いて猪瀬氏は、機械や農薬を使わない近代化以前の農業では、小さな多様な仕事が多く障害者も働けたことに触れた。そして近隣の農家との関わりから、福祉農園を舞台としてその土地在来の智恵や技術が発掘され、障害者の仕事に還元される技術として工夫され高められている様子が伝えられた。

また埼玉や千葉という都市近郊のあり方、本来は都市と農村が混在する地域の可能性を、見沼を事例として考えようというメッセージが投げかけられた。そして「見沼・風の学校」の次なるステップとして、知的交流の場としての福祉農園のあり方、大学との結び付きの可能性が議論された。

### 質疑応答より

参加者は、障害者の就労や、子供の遊び場作りに関連する活動のあり方、また行政と市民団体との共同関係、地域共同体と福祉農園の関わりの実態、あるいはモデルとしての可能性や課題などについて広く質問があった。

二人の講演者は、農という日々の作業から逃れられない営みを通じて、見沼田圃を生活の場として切り開き、試行錯誤の中で自分達の力量が上がってきたという、今までの活動を総括されるとともに、行政との交渉や利用団体間の調整などの具体的な運営に関するノウハウを披露された。

最後にコーディネイトした千葉大学の広井良典氏からは、福祉・医療と環境とスピリチュアリティの分野をつなぐ「福祉・環境・スピリチュアリティネットワーク (Welfare, Ecology and Spirituality Network:WES ネット)」構想が紹介されて、各地の事例を千葉での実践につなげたいとのコメントがあった。

広大な農的緑地空間として奇跡的に残る見沼田んぼだが、その存在意義や価

値は常に変化してきた。治水、生態系の維持、そして今日は、環境と福祉の融合による良好な生活空間の再生として福祉農園の実践が位置づけられよう。「見沼田んぼ福祉農園」、「見沼・風の学校」の活動から、“環境”、“福祉”、“市民社会”、“公共”をキーワードとする本 COE プログラム「持続可能な福祉社会に向けた公共研究拠点」の目的が地域レベルの実践として具現化できることを示していると思われる。同時にこの活動を“持続可能”なものにするよう、財政面や組織マネジメント面を含め、見沼田んぼ福祉農園、見沼・風の学校は活動基盤の強化を図るという次のチャレンジの段階を迎えているとも感じた。

(のむら・まゆみ)

(2006年2月8日受理)